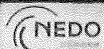


光触媒利用放熱部材開発コンソーシアム

ビルWG実証実験棟



光触媒利用高機能住宅用部材プロジェクト

ビルWG 日本板硝子(株) YKK AP(株) JFEスチール(株) 東陶機器(株)

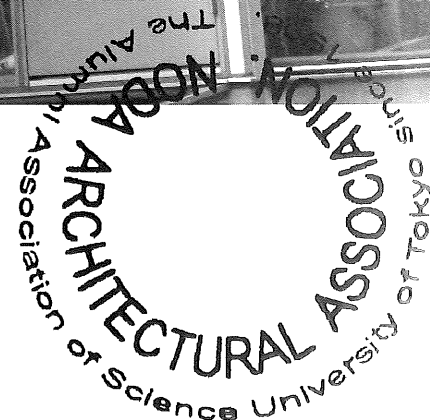
東京理科大学 建築学科 武田 仁研究室

東京大学 先端科学技術研究センター 橋本 和仁研究室

野田建築会会報 2009 秋号

N A A NEWSLETTER 09 AUTUMN

VOL.22



武田研OBが思い出を語る—武田仁先生の退官に寄せて

武田仁先生が2010年3月末で退官されることになりました。次号の会報で武田先生にご寄稿をお願いしますが、その前に武田先生と縁の深いOBの方々に登場していただき、武田先生との思い出や研究室の仲間のこと、さらにご自身の近況についてお話いただきました。(編集・千葉利宏・84年卒)

武田研を実験設備づくりでお手伝い—岩浪秀夫 (76年卒)

岩浪さんは、武田先生が着任したのが71年ですから、研究室が開設して間もない時期の卒業生です。岩浪さんの実家は東京・練馬区にある設備工事会社の(株)岩浪興業社で、跡を継ぐ決意で武田研へ。卒業後は2年間、他の設備会社で武者修行したあと、岩浪興業社に入社して、工場のプラントや公共事業などの設備工事を手がけてきました。



「設備系の研究室の中で武田研を選んだのは、当時先生が取り組んでいた太陽熱利用の研究に興味があったからです。まだパソコンもない時代ですからセミナーハウスに泊り込んで、実験データを分析したり、ソフトを組んだりして大変でした」

岩浪さんが岩浪興業社で”ものづくり”の仕事に携わるようになると、武田先生から声がかかり、大学の実験装置づくりに参加するようになりました。武田先生のアイデアを、カタチにするわけですから、ある意味、助教の方以上に先生の研究に深く関わり、長い間、武田研を支え続けてきた方です。

「当時は先生も若く、研究室の仲間たちと一緒に先生の自宅に押し掛けて遊んだことが良い思い出ですね。とにかく真面目で、ゴルフなどの遊びもほとんどしないし、ご自宅もセンサーだらけで、さながら実験棟ですよ(笑)」

今回の会報の表紙になっている「光触媒利用放熱部材開発コンソーシアムビルWG実証実験棟」の施工を、清水建設の関連会社である(株)シミズ・ビルライフケアと一緒に手がけたのも岩浪さんです。

ここで、取材の裏話一。今回、寄稿をお願いしようと8月上旬に岩浪さんにメールを送ったのですが、2週間近くも音信不通。半ば諦めていたところで、20日過ぎによく電話があつて連絡が取れました。

理由を聞くと、何と「山籠り」。岩浪さんは、1500年以上の歴史のある茨城県つくば市の千勝神社の氏子筆頭総代に選ばれて、神主の方々と、木曾の御嶽山で山籠りされていたとか。地元地域でも民生委員、放課後学校開放のボランティアなどの社会貢献活動にも熱心に取り組まれており、建築だけでなく、社会に対する幅広い見識をお持ちの方です。



武田仁先生、2003年日本建築学会賞(論文)受賞記念パーティー(2003年)

50歳を過ぎて博士号、9月から母校で講義—瀬沼央(78年卒)

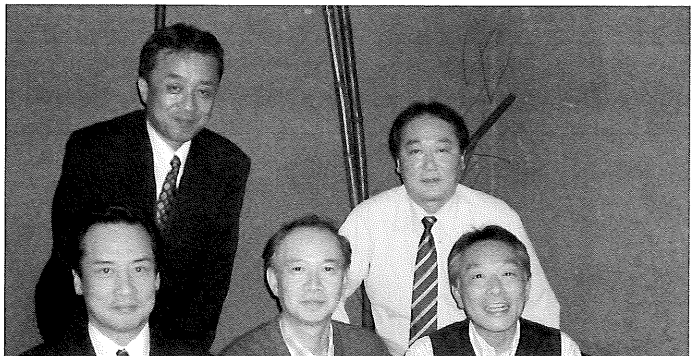
岩浪さんの紹介で、急きょ登場いただいたのがシミズ・ビルライフケアの瀬沼央(ひろし)さんです。武田先生の研究テーマのひとつ、天井輻射冷暖房システムの研究では、過去20年近く、共同研究を行い、「08年9月に博士号を取得した」という話を岩浪さんからお聞きして、連絡を取らせていただきました。

研究に着手した頃、瀬沼さんはゼネコンの日本国土開発に在籍しており、武田先生と共同で輻射冷暖房システムを商品化、特許も取得しました。岩浪さんと多くの建物にシステムを導入したそうです。しかし、1997年から始まったゼネコン危機で、日本国土開発の経営が悪化。瀬沼さんは、輻射冷暖房の技術を持ってトヨックスへ移籍し、現在はシミズ・ビルライフケアで建物のエネルギー解析、省エネ提案などを行っています。

「武田先生からは、早く研究論文をまとめて博士号を取りなさいと言われていたのですが、2006年4月に武田研の博士後期課程に入学して、ようやく博士号を取得できました」

今年9月から母校の非常勤講師として講義を受け持つことになり、いまま野田校舎通いが続いています。社会の荒波を乗り越えてきた”瀬沼先生”が学生にどのような授業を行うのでしょうか。「武田先生は、約束時間、提出物期限等に非常に厳しい先生でした。その教えは厳しい社会情勢の中で十分に活かされ、感謝しています」との武田流を踏襲するかもしれません。

瀬沼さんから72年入学同期会の近影を提供していただきました。

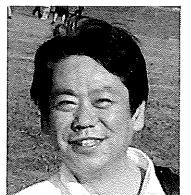


左から野澤功一瀧(上原研・戸田建設)、高橋愛次郎(武田研・東京建物リサーチ・センター)、鈴木将史(富澤研・Oval構造設計室主宰)、瀬沼央、山崎晃弘(上原研・ヤマザキ建築企画設計主宰)(2009年3月13日、新宿の居酒屋にて)

ソフトボール大会の思い出—山下開(86年卒、88年院修了)

日建設計の山下開さん(設備設計部門設備設計室長)からは、寄稿していただきました。

——私が大学生活を送った80年代はバブル景気の真っ只中で、日本は夢の中ではなかったのでしょうか。建築界も例外ではなく、バブル景気に後押しされた建設ラッシュ。幕張メッセ、つくばセンタービルや東京ドーム、90年には東京都庁が建設されました。



人類の大きな課題となっている地球温暖化、オゾン層破壊などが認知され始めたのもこの頃でした。建築においても地球環境、低炭素化社会へ向けた取り組みがスタート。一方で、一般

家庭へのエアコンの普及が急速に進み、オフィス、公共、商標施設において快適性ととも、アスベストやシックハウスなど安全な室内環境が注視され、様々な「環境」が建築分野に大きく関わりはじめた時代でした。

私は実のところ、あまり真面目な学生でもなく、環境に特段の興味はありませんでしたが、武田研究室の前に貼り出された卒論テーマになぜか惹かれて、師事させていただくこととなりました。武田先生は「建築環境」の多岐に亘る分野を研究し、空気調和設備の最適設計のために必要となる標準気象データの研究をはじめ、コンピュータを活用したプログラミング、シミュレーション手法の先駆けでした。私は水を媒体とした蓄熱による空調消費エネルギーの低減を目的とした研究を選択し、大学院修士までお世話になりました。

武田研究室は年中無休。研究室で暮らしていた毎日でした。武田先生のお声かけで、年に1回、研究室全員で旅行にでかけたのが懐かしい思い出です。私が4年の時には、学内のソフトボール大会に研究室で出場することになり、わざわざユニフォームを作ったことをよく憶えています。チーム名は「ヒートポンプス」。みんなで決めた名前、武田先生にもユニフォームを着ていただきました。武田先生の娘さんも応援に来てくださり、結果もみごと優勝!?だったと記憶しています。

卒業後は同窓生と再会する機会にあまり恵まれていませんが、最近、「縁」の大切さをしみじみと感じるようになりました。何も考えず、有難いとも思っていなかった学生時代。研究室の仲間や先輩、後輩の有難さを感じなくなったのも歳のせいだけでなく、武田先生のお陰だと感じています。



武田研ソフトボール大会 (1985年)



武田哲学から研究者としての理念を学ぶ 大塚雅之 (83年卒、88年博士修了)

「武田研OB特集なのに…」と、最初は遠慮されていた関東学院大学教授の大塚雅之さんからも寄稿をいただきました。

——武田先生が建築設備の講義の冒頭に「建築設備は、そこそこには飯の食える業種だ」とおっしゃっていたのが、約30年経過した今も記憶に残っています。その後、大学院博士課程終了後、就職先のないことに困



っていた私に、建築設備系コンサルタント業への就職を勧めて下さったのも先生でした。

在学中は、武田研OBの永村一雄氏 (80年卒・斎藤研助手を経て大阪市立大教授)、同じく鈴木宏和氏 (82年卒・熊谷組)、武田研助手の渡部真志氏 (82年卒・奥田研OB (財) 建材試験センター) などの優秀な先輩方に御指導を頂きました。

就職後、勤務先で受託した給排水衛生設備研究の一環で、理科大にある高層集合住宅実験棟を活用して性能試験を実施してもらい、先生には有益なアドバイスを頂きました。時には、非常に厳しい指導と鋭い結果の判断をされたことも良い思い出です。そんな御指導の中より、処世術も含めた武田哲学なるものを垣間見たように思えます。その幾つかを紹介したいと思います。

第一は「実用性重視の研究開発理念が信条であること」。先生の母校・早稲田大学の気質なのでしょう。とにかく研究成果は、実用的で設計や製品開発に繋がる研究であるべきとの強い信念をお持ちでした。建築学は、実学であることを実践されていました。

第二は、「このこと思ったら大きな投資を行い、成果に結びつける執念」。野田セミナーハウス付近に建つ高層集合住宅実験棟が、経年劣化した際に思い切った改修工事を実行された時には、その潔さと先見性に驚きました。それだけに実験棟を利用させていただいた研究の成果に対する要求は実に厳しいものがありました。笑。

第三は、「凡人なら学生時代に考えていたところから、それほど飛躍した発想は無理だから、思い込みを持って、やることに焦点を絞り、努力邁進せよ。また、人のやらないところで生きる」。

この言葉が、私に専門分野として給排水衛生設備の研究を継続する決心を固めさせたように思います。武田先生は、学生時代より開発された熱負荷計算ソフトLESCOMに徹底した拘りをお持ちで、世に新しいソフトが開発され普及するなか、様々な新規データを実験等で収集され、それを組み込むことで御自分が開発したソフトの汎用性や有効性を日々高める研究を継続中であると伺っております。これもまた、拘りの武田流です。——

大塚さんからは、斎藤研究室 (80~89年) のOB会の写真も提供いただきました。斎藤研では故・斎藤平蔵先生 (2005年死去) のお墓参りを兼ねて年に1、2回、OB会を行っているそうです。(連絡先: dmotsuka@kanto-gakuin.ac.jp)



左から岡庭万理子 (旧・北野、87年卒・岡庭設計工房)、岡庭御主人、柴田克彦 (82年卒・高砂熱学工業)、山口康央 (87年卒・岡山県新見市議会議員)、尾神充倫 (86年卒・UR都市機構)、岡村克己 (85年卒・竹中工務店)、伊藤正 (83年卒・鹿島)、大塚雅之 (2008年11月30日、北鎌倉・浄智寺にて)

「OBと語る会」レポート

理工学部建築学科助教 中畑昌之 (2004年卒、06年院修了)

安井 昇 (やすい・のぼる)
 1968年 京都府生まれ
 1991年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
 1993年 同大学大学院修士課程終了後、積水ハウス株式会社を経て
 現在、校設計集団一級建築士事務所代表、東京都市大学非常勤講師、早稲田大学理工学研究所客員研究員 博士(工学)



宮下 信顕 (みやした・のぶあき)
 1972年 長野県生まれ
 1995年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
 1997年 同大学大学院修士課程終了後、竹中工務店
 現在、同社設計部課長代理

2009年7月3日、野田建築会が主催する「OBと語る会」が、野田キャンパス2号館4階オープンスペースにて行われました。このOBと語る会は、理科大理工学部建築学科出身者をゲストとして招き在学生との交流を図るもので、毎年恒例のイベントとなっています。今回は安井昇氏(1991年学部卒・若松研)と宮下信顕氏(1995年学部卒・奥田研)のお二人が、詰め掛けた学生に向けて講演をしてくださいましたので、その様子をご報告します。(*1)

前半の宮下さんの講演は、「思考の継続」がキーワードであったと思います。というのも、現在、宮下さんが竹中工務店で手がけられている大規模建築物の設計のごく初期の段階では、大学の頃から考え続けているアイデアが出発点となることが多いのだそうです。

例えば、2008年日本建築学会作品選奨の「AGCモノづくり研修センター」(*2)では、学生時代のアイデアコンペで用いた光のスペクトルについての考え方を設計のコンセプトとして援用し、「アステラス製薬つくば研究センター」(*3)では、同じく学生時代から研究をしていたというベジェ曲線が平面形に強く表われていました。

アイデアコンペや設計課題を数多くこなしていく中で建築のアイデアを粘り強く考え続けることの重要性、そしてそれが将来の実務の場においても大きな武器になるのだという、

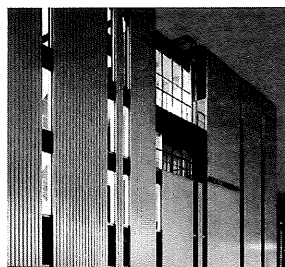
デザインを目指す学生の今をその先に繋いでくれるような講演の内容でした。

後半の安井さんの講演は、設計者であると同時に木造の防火に関する研究者でもあるご自身の立場、活動に関する内容でした。冒頭に、国産材の蓄積状況や大規模建築に必要な木材の試算量など具体的なデータ(*4)を挙げながら、安井さんがなぜいま木造建築物に特に興味を持って取り組んでいるのかということについての説明がありました。その上で、木造住宅の設計?実験など性能検証を通しての木造耐火構造の実用化(*5)・木造建築物の防火に関するコンサルティング業務・大規模な伝統木造建築の改修についての説明があり、設計業務と学術研究を横断する安井さんの多彩な活躍を伺い知ることができました。また、安井さんはご自身の来歴を、その当時考えていたこと・悩んでいたことと交えて話してください、先輩から学生達に向けての良いアドバイスにもなったのではないかと思います。

講演会終了後、両氏への御礼も兼ねた懇親会(*6)が開かれ、学生達が盛んに質問(最後は人生相談まで…)を両氏にぶつけていました。今回は、建築の設計分野について、大きく視点の異なる2つの立場から語っていただき、学生達の視界が広がった有意義な場となったと思います。



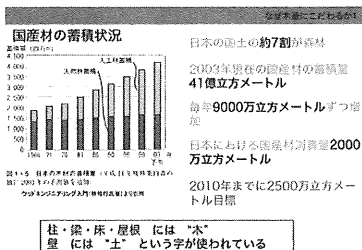
(*1 講演会の様子)



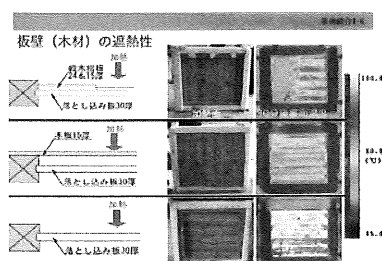
(*2 AGCモノづくり研修センター)



(*3 アステラス製薬つくば研究センター)



(*4 国産材の蓄積状況に関するデータ)



(*5 木材の遮熱性に関するデータ)



(*6 懇親会の様子)

第2回85会を終えて—『新人類』と呼ばれた 85年入学組、40代の同窓会—

85会会長 浜田 裕史 (89年卒)

「同窓会」—皆さんはこの言葉に聞いてどのようなことを思い浮かべますか。地縁の強い小学校、中学校の同窓会。多感な青春時代を過ごした高校、大学の同窓会。友人の結婚式に出て、久しぶりに旧交を温めるのも同窓会のひとつといえますね。



85会のきっかけは昨年(平成20年)の3月。現在、熊本に住んでいる私が、仕事で上京し、久しぶりに在京する同期の高安重一君に「食事でもしない?」と声をかけたことから始まりました。持つべきものは友達です。せっかく浜田が上京するのだからと4名の友人に声をかけてくれました。合計6名、久しぶりの再会は、なつかしく、そして刺激的なものでした。

私を含めて、設計事務所を運営している人、工務店を経営している人、大手の会社に勤め、やがて独立を考えている人、ジャンルも様々です。

「卒業してやがて20年経つし、85年入学の建築学科で同窓会やらない」

「そうだね。賛成、賛成」

「そのかわりみんな幹事だぜ(笑)」

大学時代の思い出話に花が咲き、楽しい夜は過ぎていきました。

活力のある一番忙しい40代だからこそ

熊本に帰り、ほどなく先日集まった同期6人の1人から、一通のメールが届きました。

「この間の話の続きで、85年の理工学部建築学科入学同期で同窓会をしよう」、そして「60歳を過ぎて人生のまとめの時期にみんな集まるよりも、社会的にも認められ、活力のある一番忙しい40代に同窓会をやろう」という内容です。

私達が卒業した当時、1989年(平成元年)頃は、バブル全盛期でした。いまでは考えられないかもしれませんが、「新人類」と呼ばれた学生1人に1000社ほどの求人があった時代です。そんな風潮も影響してか、85年入学の理工学部建築学科はほんとうにまとまりのとれたいい仲間の集まりでした。

40歳を越えると各々の進む方向性も見え、家庭をもち、社会においても責任ある立場になり、また信用が出てくる年代でもあります。「同窓会をやるなら今がよい」—そう結論づけて、大学卒業以来の同窓会開催の青写真ができました。

「会の名前どうする?」

建築とは無関係の仕事(音楽関係)に従事している友人1人を加えて7名の幹事同士でのメールのやりとりが続きます。そのようなやりとりのなか「卒業年はまちまちだけど、

85年入学だから、85会」と会の名前が決まりました。

そして、準備。幹事同士で役割を決めて、野田建築会から名簿を戴き、そして連絡先のわかった同期にメール、往復はがきを送付しました。85会出席者が何人ほどになるか、少人数だったら、どうしようとの心配をよそに、48名からお返事いただき、28名の同級生が集まりました。(同窓会を企画している読者の皆さん、どうぞ参考とされてください(笑))

平成20年の第1回85会、身なり、体型も理科大在学中とは程遠い人(実は私)もいて、最初は顔と名前が一致せず、戸惑うシーンもありました。みんな最初はぎこちなかったのですが、お酒・食事が進むうちに和やかさも増し、盛り上がりみせます。また、企画として設けた同期の近況報告も、非常に興味深かったです。またの再開を約束しつつ、楽しく、癒された一日でした。

・・・そして1年後。

今年7月に、第2回の85会を行いました。沖縄、島根、京都、静岡の遠方に住んでいる同期も含め、26名の参加です。去年は品川のフォーマルなお店でしたが、今年は西麻布のお店を貸切。店内には1980年代のBGMが流れ、ココロは学生、カラダは親父状態です。

85会も2回目になると、最初から和やかな雰囲気になります。今年は85会開催の当日に、同期の結婚式も行われていて、そのお祝いも行いました。

島田方嗣君おめでとう!

85会は「一番忙しい活力のある40代に行くこと、毎年行うこと」が会の趣旨です。昔話に花を咲かせたり、情報交換をしたり、まるで学生時代にタイムスリップしたみたいです。しかし、このような会をすることは、自分達にも刺激になるし、エネルギーをもらいます。一部の同期から「連絡先がわからない同期を、みんなで調べようぜ」との声。85会は来年、再来年、と参加する同期の輪を広げつつ、100人参加を目指して、これからも続けていきます。

最後になりましたが、85会に参加していただいた理工学部 建築学科 85年入学の皆様、幹事の皆様、本当にありがとうございました。来年もやりましょう。



第2回85会には26人の元気なオヤジたちが集合!
(東京・西麻布にて、2009年7月)

2009年NAA賞は中国からの留学生の洪章さんに

今年も、恒例のNAA賞の発表が、卒業証書授与式の間で行われました。3月19日に開かれた式典では、最初に卒業証書の授与が学部の卒業生に、その後で修士の卒業生に修了証書が手渡されました。続いて、大学から優秀論文賞や、優秀設計賞等々が発表されると、教室の中は仲間をたたえる拍手と祝福の言葉であふれていました。

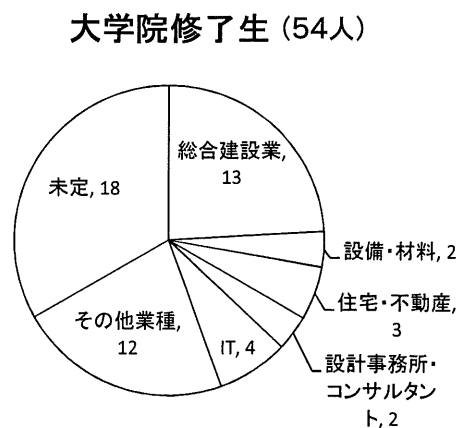
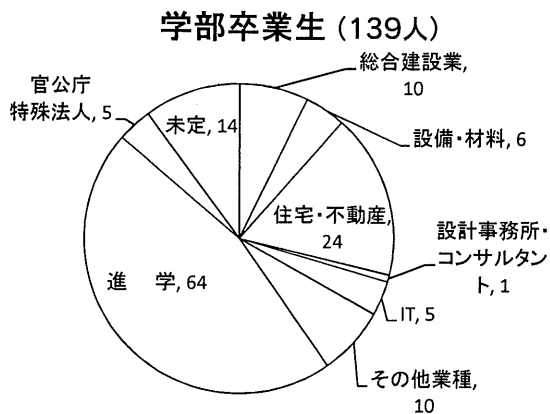
大学からの各賞の発表が一段落してから、NAA賞の発表があります。これも恒例になりました、野田建築会の菊地利武会長（71年卒）から挨拶があり、いよいよ受賞者の発表です。今年は、洪章（こう・い）さんが選ばれました。兼松研究室の学部4年で、09年3月卒業です。受賞理由は、中国（湖北省）から留学し、2月に「仕上げ材の経年劣化を考慮

したコンクリート中性化抑制効果に関する研究」と題した優秀な卒業論文を日本語で提出、発表したことです。

卒業後も、頑張ってもらいたいと思います。（五十嵐洋也・78年卒）



平成20年度（2008年度）就職等内定先



NAAからのお知らせ

【会費納入のお願い】

野田建築会（NAA）では、会則に則って平成21年度（平成21年4月1日～平成22年3月31日）の普通会員の年会費3000円を徴収しています。会費は会報の発行、OBと語る会の開催、NAAサイトの運営、見学会の開催、NAA賞の授与などの活動費用として有効に使われています。

NAAの発展と活動の活性化を図るために、本年度会費をぜひ、納入いただきますようお願いいたします。つきましては会費納入のための郵便振替用紙を同封いたします。なお、振込みの時には、封筒の宛名ラベルに記載されているID番号を通信欄に記入願います。

【編集後記】

昭和46年（1971年）に理工学部建築学科に赴任された武田仁先生が、2010年3月末で退官されると聞き、今回は武田研OB特集を企画しました。大学OBの繋がりには、同期会などの横の繋がり、研究室単位の縦の繋がりがあります。先生が退官されると、どうしても研究室の縦の繋がり細ってしまう心配があります。武田研のOB会もしばらく開催されていないようなので、今回の特集をきっかけに武田研OB会を開催されてはいかがでしょうか。今後も、研究室OB会の特集を随時、企画したいと思いますので、皆様からの情報提供をお願いいたします。（千葉利宏・84年卒）

野田建築会 会報 09秋号

2009年10月15日

編集：会報部

編集委員：有岡三恵・小園涼子・佐貫大輔・高安重一・千葉利宏・中畑昌之・前田智成・横山圭（50音順）

発行：東京理科大学野田建築会 〒278-8510千葉県野田市山崎2641

<http://www.rikadaikenchiku.com>

郵便振替 口座番号 00130-9-27644 東京理科大学野田建築会